ラブ☆シャッフル

キウイサワー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラブ☆シャッフル

【Ｎコード】
Ｎ６４０５Ｍ

【作者名】
キウイサワー

【あらすじ】
恋愛都市です。いろんなカップリングで恋愛場面を描いてみました！また後半ではカップルをシャッフルしてみよーと思ってます！

ラブシャッフル！（前書き）

カップル披露です。

ラブシャッフル！

御坂美琴は中学の卒業式を間近に控えていた。
季節はもうすぐ春。桜の実が待ちきれんとばかりに、今にも開きそうだ。
そんな学園都市では空前の恋愛ラッシュ。
６組のカップルが誕生していた。

☆御坂美琴×上条当麻
☆ラストオーダー×アクセラレータ
☆月詠小萌×ステイル・マグヌス
☆神裂火織×土御門元春
☆白井黒子×青髪ピアス
☆インデックス×カエル顔の医者（先生）

練乳をかけた苺よりも甘くスイートなラブストーリー　…だけど…
皆付き合って半年以上経ち、少なからず胸に不満を抱いていた。
そんな時、恋愛相談を受けていたカエル顔の医者が皆を集め提案をする。
「１週間相手を変えてみようじゃないか。きっとお互いを見つめなおす良いきっかけになるよ。」
１週間相手を変える！？誰もがその発言に驚いたが、中にはニヤける者もいた。

カエル顔の医者は、ただしと発言を続ける。
「新カップルになったお互いの了承が得られれば何をしても良いし…違う子を好きになればそっちへ行って良いものとする。」
エーっ！と特に女陣が声をあげて不安になるも、男陣も動揺を隠せない。特にステイルが動揺しているようだ…。
「恨みっこ無しだよ。じゃあ順番にカードをひこうか！」
それぞれがドキドキしながらカードをひいていく。
それは全くの運任せ
神様が選んだ相手であるが…
吉とでるか…
果たして……。

ラブシャッフル！（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

美琴×当麻☆エピ1（前書き）

付き合う前の話です。

美琴×当麻☆エピ1

とある夏の日、帰り道に偶然出会った二人は、一緒に下校していた。

「あーなんか最近楽しいことねーなぁ。そうだ！今日あそこの河川敷で花火大会あるから一緒に行くか？」

当麻は何気なく美琴を誘う。

ーーえっうそ！うひゃー…ーー

美琴は頬を赤くそめ、少し照れた様子で頷く。

「うん。」

「よし。じゃあ行こうぜ！」

花火が始まるまで2人は出店でたこ焼きを食べたり、射的や金魚すくいをし過ごした。

「あー楽しかったぁ！」

美琴は満足そうな表情をしていた。

花火までもう少し時間があるので、2人は誰もいない土手に座って空を眺めていた。とても澄んでいて星がキレイな空に2人の心は癒される。

「なんか…覚えてないけどさ、俺たち初めての出会いって悪かったんだろうな。」

当麻は記憶喪失のため、美琴に会った日のことを何も覚えていないが…思い出を語る。

「怖そうなお兄さん達に囲まれてるか弱い女の子を助けようとしたら、その子はレベル5の強いお嬢様だったってね（笑）」

「だいたいアンタが余計なこと言うから！…って覚えてないか。」

「でも、こうして友達になれてほんとに良かったよな。」
美琴は思わず当麻から視線をそらす。
ーーはぁ…わたしは別に…ーー
ヒューパンパン！ドン！
空に花火が舞う。何度も何度も散っては空に舞いあがる。
「きれいだな…。」
当麻は花火を見つめ呟く。美琴は当麻に目線をやる。
なぜだか美琴は、少しせつない気持ちになった。
「わたし…別に強くなんてないよ。いつだって肝心な時はアンタが助けてくれた…」
当麻は美琴を見る。美琴はいつになく真剣な表情をしていた。
ヒュー…ドン！
「わたしは…わたしにはアンタがいないとダメなの。」
「美琴…」
ヒュー…ドンドン！
「わたし…当麻が好き…」
ヒュー……パァン！
静かな夜に花火の音だけが響く。
美琴はプイっと当麻に背を向けた。極度の緊張で足が震えている。
ーーわたし…とうとう言っちゃった…ーー
美琴は少し下を向く。泣きそうだ…

当麻は美琴の肩に手をおいた。そして、力任せにこっちへ振りかえさせる。
「ちょっ！…」
次の瞬間、当麻は優しく美琴を抱きしめた。
美琴は全身の震えが止まらない。当麻は美琴を抱き締めている腕に、ギュッと力を入れ口を開く。
「ほんとは…俺もずっとこうしたかった。」
当麻は腕を離し美琴と見つめあったが…美琴は全身の力が抜けその場に倒れてしまう。
「美琴！？」
美琴は地面に倒れたまま動かない。
「なんかわかんないけど…体に力が入んない…。」
極度の緊張のせいか、美琴はぐったりしている。当麻は、そんな美琴の髪をかきあげ顔を覗く。
「ちょっとやめてよ！」
美琴は顔を真っ赤にし、両手で押し退けようと抵抗する。当麻は美琴の両手を地面に押さえつけ、顔を近づける。
「えっ…」
当麻は起き上がると顔を真っ赤にしていた。
ーーキスしちゃった…！？ーー

美琴は気絶する寸前だった。

美琴×当麻☆エピ1（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

美琴×当麻　エピ2（前書き）

付き合ってからの話です。

美琴×当麻　エピ2

念願叶い、美琴と当麻はカップルとなった。
一緒に下校してクレープを食べゲーセンに行ったり…休みの日には海へ行き釣りをしたり、2人はいろんなとこへ出かけた。そして今日は待ちにまった休日。

「お昼何食べに行く？」
美琴は笑顔で当麻に話しかける。2人は仲良く手を繋ぎ商店街を歩いていた。
「んーそうだな！ラーメンなんてどうだ！？」
当麻の目の前にはラーメン屋があった。
「ここのラーメンなインデックスが好きなんだよ。」
当麻も笑顔で美琴に話す。

ーー当麻ってインデックスのことばっかり話す…ーー
一緒に住んでいるため、当麻がインデックスの話をよくするのは仕方がないことだが、美琴はいちいち反応してしまう。

「今日はラーメンって気分じゃないかも…。」
「じゃあこの定食屋はどうだ！？インデックスも大満足なボリュームだったぞ！」
ーーう…うううぅーー

「あたし今日米はちょっと…。」
「じゃああそこのイタリアンカフェはどーだ！？オシャレすぎてインデックスとは入れなかった店だ…うぅ。」
ーーはぁぁん！？全然面白くないし…ってかインデックス3連続ときた。イラッーー

「美琴さん外国料理なんて興味ないし！」
美琴は声高らかに言う。
「お前ラーメン駄目で米ダメで洋食ダメだったらこの小さな商店街には何もないぞー！！」
当麻は頭を抱え叫んだ。
「別に腹減ってねーし！」
「美琴さん…１０分前と言ってることが全然違う…。」
当麻は泣いていたが、その時携帯電話がなる。
「おぅ五和か！？どうした？……えっ……わかった！」

ーーでた！天草式の五和…まさかまた行く気じゃぁぁーー
美琴の表情が曇る。

「み、美琴さん…ちょっと行かなければならない用事が出来まして…ほんとすみません！このお詫びは必ずしますので…。」
当麻は土下座をしそう言うと顔をあげる。そこには不機嫌極まりない顔をした美琴がいた。
「ひぃ！」
「あんた…いい加減にしてよ！インデックスとか五和とか…他の女にも世話やくし。わたしもうわかんない…。……行ったら別れる。絶対別れる！」
美琴は勢いで当麻に感情をぶつけた。
「ほんとうにごめんって！美琴そんなこと言わないで。俺は美琴一筋だよ…でも急いでるから行ってきます…ごめんなぁ！」
と美琴の感情をスルーし、当麻は走っていった。
ーーえっ…当麻…ーー
「別れるって言ってんのにぃぃぃー！！ひどぅぃぃー！！」
美琴の声は届かなかった…。
ーー当麻とは合わないのかな…ーー

美琴は不安になる。

一方当麻は…

ーー美琴は感情的すぎるんだよなぁ…次会うのが怖いーー

当麻も不安を感じていた。

美琴×当麻　エピ2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

ラストオーダー×アクセラレータ　エピ1（前書き）

時遡ってます！

ラストオーダー×アクセラレータ　エピ1

ラストオーダーは、黄泉川愛穂の薦めで7月の1カ月間だけ日中は青少年自然教室に通うことになった。
「同い年くらいの子と触れ合うことも大切じゃん。」
という感じで半ば強制的に、ラストオーダーは朝の9時から昼の15時まで課外授業を受けた。送り迎えはアクセラレータが同行し、課外授業中も施設内広場で昼寝したりとラストオーダーを見守っていた。

ラストオーダーのグループメイトで黒髪にツンツン頭の8歳くらいの少年、五朗はそれを不思議そうに見ていた。
ーーあの人何なんだ！あの子の何なんだ！？ーー
五朗はラストオーダーの見た目がタイプだったのだ。

今日の授業が終わりラストオーダーとアクセラレータは帰り道を歩いた。
「授業どォだったんだァ！？」
「うーん。楽しかったよーってミサカはミサカは満足してみる。」
「友達できたかァ？」
「うーん…皆ちょっとガキすぎるってミサカはミサカは上目線で言ってみたり。」
「なァに言ってんだァ！ばーかァ。」
ラストオーダーは笑っていた。

その3m後ろには五朗が歩いていた…
ーーガ…ガキすぎるだってぇーー

次の日、五朗は勇気を出しラストオーダーに声をかける。

「ミサカさんおはよう！ボク今日燕尾服を着てみたんだけど…大人でしょ！」
「おはよー！えーそれは大人が着るものなのってミサカはミサカは驚いてみたり。」
ラストオーダーは笑顔で言う。
ーー失敗か…でも可愛いーー
「ところで、いつも一緒にいるあの人は誰なの？お兄さん？」
五朗は慎重に探りをいれる。
「違うよー。一緒には住んでるけどってミサカはミサカは訂正してみる。」
「えっ一緒に住んでるの？どういう関係？」
五朗は不思議そうに聞く。
「えっえーと…関係？うーん、わからないってミサカはミサカは困ってしまうぅ…」
五朗の謎は解けなかった。

そして帰り道。
「今日ね、グループメイトの子にアクセラレータとどんな関係なのって聞かれたけど答えられなかったってミサカはミサカは悲しくなる。あなたとはどんな関係なの？」
「あァそんなの別にねーよォ。」
一方通行は今頃何言ってんだと云いたげな顔だ。
そこへ五朗がくる。
「その態度は何だ！そんなヤツの側じゃなくて、ミサカさんボクの家に来ませんか？ボクのお母さん料理すごく上手だし……じゃなくて！ボ、ボクはミサカさんが好きだ！」
五朗は顔を真っ赤にし、思いを伝えた。
ラストオーダーも驚いていたが、真剣な表情になる。
「ありがとう…でもミサカはミサカは…こ、この人が好きなの。」
ラストオーダーは顔を真っ赤にしアクセラレータを見る。

五朗は驚きと怒りが混ざり合い、思わず叫ぶ。
「そんなおじさん…冷たそうだし、だいたい血も繋がってないのに年が離れた人と一緒にいるっておかしいよ！」
五朗は必死だ。

オイガキ…っとアクセラレータは殺気全開に話しだす。
「コイツは他人なんかじゃねェよォ！俺が命に変えても守ってやるんだからよォ！」
一方通行の気迫に五朗は押される。
「えっと…それはどういうことなの…ですか！？二人は両思い？？」

「そォだよォォ！！」
ラストオーダーはキャッと声をあげ喜ぶ。
五朗は目をキョトンとさせる。完全なる噛ませ犬だったのだから。

「これからは彼氏彼女だねってミサカはミサカは胸をわくわくさせるんだからぁ！」

ラストオーダー×アクセラレータ　エピ1（後書き）

次は付き合ってからの話です！

ラストオーダー×アクセラレータ　エピ2（前書き）

付き合ったあとです。

ラストオーダー×アクセラレータ　エピ2

ラストオーダーとアクセラレータは毎日一緒にお風呂に入った。
「ねぇねぇ背中流してってミサカはミサカは甘えてみる。」
「またかよォ。」
アクセラレータは優しかった。

2人は、同棲生活をしているのだ。

とある日ご飯をファミレスで済ませ、家に帰った2人。
「たっだいまぁ。」
ラストオーダーはおもむろにテレビをつける。
「はァ。ダルいなァ。」
アクセラレータはベッドに座る。
「ここは占領したぁってミサカはミサカはこの場所がお気に入り～。」
胡座をかいて座るアクセラレータの股の中にラストオーダーは突撃し、チョコンと体育座りをした。
「あったかぁーい。ってミサカはミサカは人の温もりに感動する。」
ラストオーダーは無邪気に微笑んでいる。
「きゃっ！」
「ならァもっと感動させてやるよォ！」
アクセラレータは後ろからラストオーダーを抱き締めた。
「もう一人ぼっちじゃないよねってミサカはミサカはあなたに確認する。」
ラストオーダーは少しせつなそうな顔をしている。
「あァ。オレもお前も一人なァんかじゃねェ。オレはずっとお前の側にいてやるよォ。」
ラストオーダーはその言葉に喜ぶ。

ーーここが……ミサカはミサカは、居場所が出来たんだぁーー

2人は再びテレビを見ていた。
「ちょっとコーヒー飲もォ。お前も何かいるかァ？」
「ミサカも行くぅ！」
「じゃァ取ってきてくれよォ。」
「いやぁ！一緒に行こうよーってミサカはミサカは駄々こねてみる。」
「あァわかったよォ。」

2人はまだテレビを見ている。
「オレァちょっとソファーで横になるかなァ。」
「じゃぁミサカもミサカも横になるー！」
「あっそおォ…」

2人はソファーで横になっていた。
「トイレトイレェ。」
アクセラレータが起き上がる。
「ミサカもミサカも一緒に行くー！」
「来たら殺すぞォォォ！」
「はぃぃ…ってミサカはミサカはシュンってなる。」

2人はベッドで寝ることにした。ラストオーダーは怖い夢を見てガバッと起きる。
「アクセラレータぁ！怖いよってミサカはミサカは…。」
ラストオーダーの体はがくがく震えていた。

「あァ、しょうがねェなァ！」
アクセラレータは優しくラストオーダーを抱き寄せ、顔を近づける。
「きゃっ！」
ラストオーダーの震えが止まった。
ーーキスしちゃったってミサカはミサカはぁぁ…ーー
「もう1回してってミサカはミサカは甘えてみる。」
「あァ？」
「…」
「もう1回！」
「またァかよォ…。」
「…」
「もう1回だよぉーってミサカはミサ……」
「何回やんだよォ！オラァ！！」
そんなやりとりを数十回続けたアクセラレータは、さすがにキレて寝てしまった。

次の日、早く目覚めたアクセラレータはコンビニに行っていた。
ラストオーダーも目を覚ます。
「あれっ…」
アクセラレータが帰ってくる。
「おォ起きたかァ。」
「アクセラレータ！起きたら一人で寂しかった…ずっと側にいてやるって言葉はウソだったのってミサカはミサカはあなたに言う！」
「あァ！ちょっとコンビニ行っただけだろォがァ！」

「一緒に連れてってよってミサカはミサカは言う！」
「大体ずっと側にっつっても２４時間は普通にムリだろォがよォ！」
「ムリって言ったぁってミサカはミサカは泣いちゃうんだからぁー。」
でもラストオーダーは涙が出なかった。
ーーずっとはムリってどーいうこと！ミサカはミサカはずっとアクセラレータの側にいたいのに…ーー
ラストオーダーは不安になる。

一方では
ーーはァ…あの甘える性格どォにかなんねェかァ…ガキだから仕方ねェけど…ーー
アクセラレータも不安だった。

ラストオーダー×アクセラレータ　エピ2（後書き）

次のカップルどーしましょ…

月詠小萌×ステイル・マグヌス　エピ1（前書き）

付き合う前です（＜＞）

月詠小萌×ステイル・マグヌス　エピ1

月詠小萌は学校の教師だ。８月は学生たちが夏休みのため、最終下校時刻には帰るようにパトロールをする日課があった。

そのころステイルは、やさぐれていた。

「イ…インデックスに彼氏…だとぉ。しかもあの爬虫類みたいなオヤジが…。」

公園のベンチに座り呟いている。ステイルはタバコを吸った…吸いまくった。

「失恋とはなんて辛いものなんだ…。」

ステイルは遠く彼方を見上げた。彼の心の傷は深かったのだ。

「あー！未成年のタバコはダメなんですよー！何度言ったらわかるんですかぁ！？」

たまたま通りかかった月詠小萌は、ステイルの持っているタバコを没収する。

ステイルはすぐに新たなタバコを取りだし吸おうとするも、またまた月詠小萌に没収されてしまう。

「もーいいんだよ。頼むからほっといてくれ。」

ステイルは鋭い眼差しを向ける。

「残念ながら先生はそんな目をされてひびるような弱い人ではあり

ません！未成年には未成年の楽しみ方があるのですよー。そんなにやさぐれて…うちに来ませんかぁ？先生も一人で寂しかったところなのです！」
月詠小萌は手を差し伸べる。

しかし、ステイルがその手を掴むことはない。
「行かねえよ。」

月詠小萌はそのまま手を伸ばし、ステイルの上着のポケットからルーンのカードを1枚抜き取る。
「ダメです！これが人質ですよー。先生に付いてくるのです！」

「なっ…。」
ステイルは驚く。

そして…鬼ごっこが始まった。

「先生は足が短い分回転が速いのですよぉぉー！」
月詠小萌は１０年以上ぶりに全力疾走した。気持ちが良かった。

しかし、
「遅いっ！」

小萌が角を曲がった瞬間、目の前にステイルが現れる。
「きゃあ！」
驚いた月詠小萌はつまづき転んでしまった。壁に頭をぶつけた様子で気を失っている。

「おい！大丈夫か！？まぢか…。」
ステイルは予想外の出来事に戸惑っていた。

月詠小萌は見慣れた景色の中で目覚めた。
「いつの間に帰ってきたのですかね…。いたたっ。」
月詠小萌は頭にたんこぶがあることに気付いた。

「そっか、転んで…！もしかして、あなたが助けてくれたのですかぁ？」

横にはステイルが座っていた。

「目が覚めたのなら帰ります。」
ステイルは立ち上がりドアの方へ向かった。

「えっここに居ましょうよぉ！」
月詠小萌の言葉にステイルは足を止める。

「落ち込んでるのはわかってるんですよー。先生はあなたの力になれます。いや、なりたいんです。一人で抱え込まずに思いを分かち合うのです！」
月詠小萌は優しく言葉をかけた。

「どーせわかんねーよ。言ったってどうにかなることじゃない。」
ステイルの傷は癒えない。

「そんなことないです！あなたは一生そのままでいたいのですかぁ！？先生に話してください、逃げてちゃダメなんですよぉ！」
月詠小萌も真剣だった。それだけはステイルにも伝わった。

「クソが…。」

ステイルは拳を握りしめた。

「じゃあオレと付き合えるか！？いまのオレは…オレはそんくらいしてもらわねーと癒されない…」

ステイルは床に膝をつき下を向いた。

月詠小萌は深呼吸をして、口を開く。

「いいですよ。それであなたの心が癒されるなら。」

彼女は幼い表情で微笑んでいた。

月詠小萌×ステイル・マグヌス　エピ1（後書き）

読んで頂きありがとうございました（ＴｏＴ）

月詠小萌×ステイル・マグヌス　エピ2（前書き）

その後…

月詠小萌×ステイル・マグヌス　エピ2

ステイルは小萌の家に居候することにした。

小萌はいろんなことを教えた。パーソナルリアリティーについてだけでなくスーパーでの買い物の仕方、焼き肉の食べ方、世渡りの仕方などステイルに日々教えていった。

ステイルはくだらないという表情をしていたが、全てが新鮮で興味深かった。

ステイルは小萌の温かさに触れ、少しずつ心が癒されていった。

ーー僕は小萌が本当に好きだーー

ステイルはどうにか小萌に恩返しがしたいと考えるようになった。いつも何の見返りも求めず、ステイルに明るく接しステイルのために行動してくれる小萌に、感謝の気持ちでいっぱいだったのだ。

ーー僕も小萌のために何かできることはないか？ーー

そしてステイルは思いつく。

ーー小萌にイギリス旅行をプレゼントしよう！2人で初めての旅行…あわよくば…ーー

ステイルは小萌のためと言いつつ、自分の欲望丸出しだった。最低だ。

ーー冗談だ…ーー

「おい。イギリスとか興味あるか？」
「イギリスですかぁ！？すごく好きですよ！昔行ったことありますが、まだまだ行けなかったところいっぱいでしたぁ。」

ーーチャンスだ！ーー

ステイルは勇気を出して言う。
「じゃあ今週末イギリスに行こう！２人で。」
「今週末ですかぁ！先生は仕事もあるし、そんなお金の余裕は持ち合わせていませんよー。」
小萌は普通に断る。
「旅費なら心配するな。飛行機だってすぐに手配できるぞ。時間だけ空けてくれ。」
ステイルは真剣な表情だ。

「いやダメなのです。お子様にお金出させるなんて保護者として失格なのです。」
「お子様…なっ！僕はお子様などでは断じてなぁぁぁぁい！！」
ステイルは立ち上がり憤慨する。
「大体見た目貴様のほうがお子ちゃまだぞ！！！」

「なっ…先生はお子ちゃまじゃありません！自立した成人です。ステイルちゃんはまだまだ悪い子ちゃんなのです！ぷんっ」

ステイルはわなわな震えいる。
「僕は貴様の彼氏だ！もっと頼ってくれてもいいんじゃないか！それとも遊び半分で付き合ったのか！？」

小萌は困った表情をしステイルを見つめている。

「ステイルちゃん…」

ステイルは小萌に近づき両肩に手を置いた。

「小萌…目をつぶれ。」

「な…何をする気ですかぁ！」

「いいから！」

「嫌ぁ！絶対ダメなのです！ステイルちゃん正気に戻ってください！！」

「失礼な…僕はずっと正気だぁぁ！！」

ステイルは小萌に無理やり顔を近づける。唇が近づく。

「ステイルちゃーーん！」

小萌えはステイルに頭突きし難を逃れることとなった。

「い…痛い…。もう付き合って４カ月なのに…。ひどいよ。」

「ス…ステイルちゃんごめんなさい。先生は悪気があった訳では…

…焦らずいきましょうよ。」

「先生って言うなぁ！そしてお子ちゃま扱いを辞めろー！！」

ーー小萌は僕のこと好きなのか…？？ーー

ステイルは小萌の愛情が恋愛とは別物ではという不安が常に消えない。

ーーはぁ。ステイルちゃん本当は良い子なんですけどね…思春期ですかね。ーー

小萌は恋愛しているのか…！？

月詠小萌×ステイル・マグヌス　エピ2（後書き）

呼んでいただきありがとうございます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6405m/

ラブ☆シャッフル

2010年10月17日14時02分発行